

わたしたちがみた 当世美術館事情 3

08年度美術館調査報告書

Contents

はじめに 福のり子	3
調査対象美術館一覧	8
第1章 これが美術館	
日本の学芸員に関する調査 郭潤夏・金智軟	14
美術館のアンケートに関する調査 市村茉莉・安田和	40
教育普及活動 ～昔・いま・これから～ 細川知美・渡川智子	62
これが日本の美術館館長だ 丸山るい・森長園香	84
第2章 これも美術館	
美術館と映画 有光晴香	108
日本と海外、美術館の入館料 金孝恩・小畑哲也	126
インターネット座談会	164
おわりに 山下里加	179
これまでの活動報告	180

はじめに

「これが美術館」そして「これも美術館」という2つの章からなる、『わたしたちがみた当世美術館事情3』がようやく完成しました。これは京都造形芸術大学 芸術表現・アートプロデュース学科(ASP学科)の2年生を中心とした学生が、1年間取組んできた調査の報告書です。

本大学は芸術大学ではありますが、ASP学科は、いわゆる「制作系」ではありません。この学科の学生たちは、いかにすれば「アート」を、社会や生活のなかで活かしていけるかという課題に、研究や実践を通して取り組んでいます。卒業生たちの進路は、教師になったり、自ら画廊を立ち上げたり、あるいは美術館やアート系のNPOに勤めたりと様々ですが、彼らの多くは卒業後も、アートと社会をつなぐ仕事に就いています。こうしたASP学科の学生にとって、美術館は学びの場であり、活動の場であり、そして将来の就職先となるかもしれない大切な場所なのです。その美術館の活動と現状をもっとよく知り、問題点や存在意義についてしっかりと考えてもらいたいと願って始めたのが、この「美術館調査」です。

本調査は、始まって今年で3年目になります。毎年、調査テーマは学生たちが独自で考えます。過去2年間の報告書を読んだ今年の学生たちのなかには、「もう全部出尽くしているから、これ以外のテーマは考えられない」と、頭を抱えていた学生もいました。彼らに「自分の経験からでた、素朴な疑問をテーマにしてほしい」とアドバイスしていくと、美術館への期待や不満、あるいは自分たちの将来の夢などを語り始めます。

「いつか、母国に帰って学芸員になりたい」と願う韓国からの留学生、「美術館で映画が上映されるようになったのはなぜ?」という映画好きの学生、「実は、美術館に置いてあるアンケートに答えたことがないんです」と告白する学生。教師を目指す学生は「教育普及について知りたい」と言い、「考えてみれば、館長さんには、一度もお目にかかったことがない」と言い出す学生もいました。こういった彼らの、ふともらした一言が、今回のテーマの背景にあります。

きっかけは素朴でも、調査や分析を進めていくうちに、彼らはいくつもの壁に、ぶちあたり、悩み、そしてなにかを学んでいきます。世界の美術館が調査対象となっている学生たちは、情報をネットで収集することが多かったようですが、それを調べるだけでも言葉の壁が立ちただけで、とても苦労したようです。こういう体験をした学生たちは「英語は、ちゃんと勉強しないとだめだ」と、自分自身だけでなく、他の学生たちにも真剣に語っています。

「日本の学芸員」について調査した韓国の留学生たちは、「日本」や「学芸員」という枠を飛び越えて、アジア・太平洋諸国における、女性の社会進出度についても調査しています。

美術館が実施する、「来館者アンケート」について調査した学生グループがあります。彼らはデータを集める為に、自分たちでアンケートを制作し、それを日本全国、102館の美術館に送付しました。ところが、送付したアンケートに不備があり、当初予想していたデータが得られず、分析できない箇所があることが判明したのです。アンケートを作るということが、どれだけ大変で難しいかを身をもって学んだ彼らは、「これから美術館に行ったらアンケートがあったら、絶対に記入する!」と語っています。

嬉しい発見、貴重な経験をした学生たちもいます。

教育普及をテーマに選んだ学生たちは、「美術館の予算は近年減っているが、普及専任スタッフの数は増えている」ことを突き止めました。このグループのひとり、卒業後、美術館で教育普及の仕事に就きたいと願っています。将来、自分の進みたい道が、厳しくとも、決して閉ざされてはいないということを、彼女はこの調査から知ったのです。彼らのアンケートに答えてくださった美術館のうち、約34%もの館が、「普及活動を開始してから来館者が増えた」と答えています。将来就きたい職業に、早くも「意義とやりがい」をみだせたこの学生の、嬉しそうな顔が忘れられません。

「館長」について調査した学生グループには、返送されてきたアンケートに思いがけない言葉が添えられていました。京都国立近代美術館の館長である岩城見一氏から「アンケートだけではわからないことも沢山あるでしょう。一度、直接会って話しましょう」と書かれていたのです。彼らが岩城氏にさせていただいたインタビューも、この報告書に掲載しています。

「入館料」について調査した学生グループは、「貧乏学生にとって、入館料は高いから」そして「数字さえ集めればいいから、一番簡単だろう」という理由で、このテーマに決めました。しかし彼ら

は、「国によって、どうしてこんなに入館料が違うのか?」という、疑問にぶちあたったのです。自らにわき起こった疑問ですから、なんとかその答えを探したい。気がつく、彼らは世界7ヶ国もの、文化行政や文化支援について調べていました。徹夜が何日も続く大変な調査でしたが、次々と疑問を解き明かしていく彼らは、周りからもうらやましがられるぐらい生き生きとしていました。

この調査を通してたくさんの方を経験し、学んだ学生たちですが、彼らが一番学んだことは、ひょっとしたら「ヒト」についてかもしれません。どんなに潤沢な資金があり、すばらしい建物や収集品があっても、もしそれらを「人々」のために、より有効に活用しようと努力する「ヒト」がいなければ、それらは単なる「ハコ」や「モノ」になってしまいます。

美術館の歴史を振り返ると、世界の美術館はまず作品(モノ)を保存、収集、展示することから始まりました。その後、このような活動はなぜするのか、だれのためにするのかと考え始められたのです。「教育普及」をテーマにした学生が述べているように、現在では、美術館とは「人々が作品を通して様々な価値観を発見し、見直しをしていく場」であると考えられています。つまり、美術館の活動は、「モノ中心」から「ヒト中心」へと変化しているのです。「ヒト」とは来館者だけではなく、まだ美術館に足を運んだ経験のない人も(今年の学生は、一度も美術館に来たことがない人たちも調査対象にしました)、そして美術館を内部から支える人々をも含んでいます。

ヒトが作った作品を、ヒトがヒトのために展示する場所が、美術館です。そのことを学生たちは今回の調査を通して、「実感」として学んでくれたようです。彼らには、この根本理念を、社会にでてもずっと覚えていてほしいと願っています。

「人と美術館」について、今年の1月に私は短いエッセイを書きました。京都新聞に掲載されたその記事を、次のページに掲載しています。

最後になりましたが、「美術館調査」にご協力いただきました、すべての皆様に心からお礼を申し上げます。経費や人員削減の厳しい昨今、美術館関係者の方々の忙しさは年々増していることと思います。そんな大変な状況下、不躰な質問をも含んだアンケートが、ある日突然舞い込んできて、お困りになった方もいらっしゃると思います。それにもかかわらず、本当にたくさんの美術館から回答を頂戴しました。なかには、何ページにも渡って、丁寧に回答に記入してくださった方や、追加調査をお願いした学生たちと、快く会ってくださった方もいらっしゃいます。皆様のご協力のおかげで、本調査が可能となり、同時に学生にとって美術館は、さらに身近な、そして大切な場所となりました。

『わたしたちがみた当世美術館事情』は、決して「完璧」な調査ではありません。しかし、これを長く続けていくうちに、通常、外からではわからなかった美術館の姿が、少しずつ鮮明にみえてくるのではないかと考えています。あるいは、内側にいるからこそ見えなかった美術館像を、関係者の皆様にお伝えることも可能になるかもしれません。というわけで、来年もまた調査を続行いたします。どうか、今後ともご協力をいただけますよう、何卒、何卒よろしく願い申し上げます。

福のり子

京都造形芸術大学 芸術表現・アートプロデュース学科教授
アート・コミュニケーション研究センター(ACC)センター長

<http://acop.jp/>

おわりに

ご協力いただいた美術館関係者の方々への謝辞として

本年度も 3 回目となる美術館調査を、『わたしたちがみた当世美術館事情 3・08 年度美術館調査報告書』として冊子としてまとめることができました。これも、学生たちのアンケートや取材などにご協力していただいた多くの美術館関係者のみなさまのおかげであり、あらためてお礼申し上げます。

この美術館調査は、これまでに 2 冊の報告書を刊行しており、昨年は国立国際美術館にて報告会をかねたフォーラム『知的ワンダーランドとしてのミュージアム』(2008 年 2 月 10 日)も開催しました。冊子を手にとられた方々から、多くの励ましや賞賛のお言葉とともに、いくつかの厳しいご意見もいただいています。そのたびにこの『美術館調査』が単なる学生の授業レポートでは終わらず、現在の美術館業界に何らかの反応を巻き起こす「事件」となっていることを実感しています。

厳しい意見のひとつに、調査内容の正確さ、信ぴょう性を指摘される方がいらっしゃいました。ご指摘の通り、ここに現れてきた数字やコメントは、日本の美術館の完全な実像ではありません。まず、データの母体となる美術館の館長、学芸員、担当職員すべてからの回答を得られたわけではなく、インターネットや文献などでの調査もすべてを調べ尽くしているとは言えません。学生たちのアンケート作成が未熟であったがために、的確なデータを集めきれない部分もあります。

この冊子に収録されている調査データおよび分析内容は、タイトルどおり“わたしたちがみた”つまりは“わたしたちがみることができた”現代の美術館事情の一断面です。その限界を謙虚に受けとめながら、私たちは、私たちがとらえることができた事象をどのように伝えていくのか、学生同士あるいは教員を交えて、何度も何度も検証し合いながら、今お手元にある報告書内容へと昇華させてきました。

また、この美術館調査は学生のたちの素朴な疑問を出発点としています。そのため、テーマによっては少々不躰と思われるような質問が入っている場合もあります。たとえば学芸員や館長の給与や学歴をたずねることは、学生の調査としては踏み込みすぎているかもしれません。「金の多少でこの仕事をしているわけではない」といわれる学芸員の方もいらっしゃるでしょう。唐突にアンケートを送りつけるだけでは、ひとり一人の情熱や見識、日々の積み重ねを汲み上げるまでに至らないことを、私たち調査者は深く心にとめておかななくてははいけません。

一方で、私たちは、これらの調査データから個々人の思いとはまた別の、「日本の美術館」が浮かび上がってくるのを目の当たりにしました。学芸員の給与や労働時間、仕事への考え方に、これほどに男女差があることをどれだけの方が認識していたでしょうか。また、館長とひとくりに呼ばれる役職に就いておられる方々にも多様な背景と目指す理想があり、「美術館とは何か?」という問いかけをいっそう難しいものにしていきます。

さらに今回の調査では、特に予算と人員の不足、削減という厳しい現実があらわになりました。この傾向は、さらに厳しくなっていくものと予想されます。そんな状況でも様々に工夫をされ、奮闘されている館長、学芸員、担当職員の方がおられることは、学生たちに大きな勇気を与えてくれました。学生もまた、それぞれの事情を抱えながら同じ社会状況のなかでもがいているのです。現状を乗り越えようとしてされている美術館関係者への賞賛は、安易な同意ではなく、心からの共感であり、希望なのだと思えば受け取っていただければ幸いです。

毎年、何通ものアンケートを送り付け、返答を求めることは美術館関係者のみなさまにとって大きな負担になっているかと想像します。この調査報告書の中にひとつでもお役にたつこと、発見されることがありましたら、これからどうぞお力添えいただけるようお願いいたします。

最後にもう一度、ご協力いただいた美術館関係者のみなさまにお礼申し上げます。今後とも、ご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしく願いいたします。